九州産業大学国際文化学部紀要　第12号 81—108（1998）

ジョルジュ・サンド——ギュスターヴ・フロベール往復書簡を読む（VI）——普仏戦争の中で——

持　田　明　子

（1998年5月20日受理）

なんですって，大切な先生？あなたもまた！意気阻喪して，悲しんでおられるのですか？それでは意志薄弱な人間はどうなるのです？（…）これがまさしく本来の人間なのです！今こそ理論を打ち立てるがいい！「進歩」を，知性を，そして「大衆」の良識を，フランス国民の温和さを褒めそやすがいいのです！断言しますが，今，もし誰かが「平和」を説くことを思いつきでもしたら，その人間は殴り殺されることでしょう。

（フロベールよりサンドへ，1870年8月3日）[1]

1870年後半は，2人の〈老吟遊詩人〉の相方にとり，悲痛な思いに充ち，暗澹（あんたん）として過ごす日々であった。66歳という年齢を迎えたジョルジュ・サンドが戦時下にあって，パリを訪れることはもはやなく[2]，遠く離れて暮らす2人が，それぞれの考えや心情をこれまでにも増して率直にペンに託したとしても不思議はない。

6月，フロベール，サンドのそれぞれが，深い共感の絆で結ばれてきた年来の友人を失い，いわば精神の拠り所を不意に取り上げられてしまったような，言いようのない寂寥感にとらわれる[3]。

「文学」を語り合える最後の友がもはやこの世にない，という絶対的な孤独感に打ちのめされたフロベールの手紙に，〈死〉のイメージが鮮烈である。

〔手紙92〕　フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1870年〕 6月26日，日曜日

またしても，友の葬儀を行ったばかりの吟遊詩人をあなたは忘れておしまいです！ マニー亭の夕食会を始めたとき，われわれは7人でしたが，今や3人だけです！ 私はまるで古い墓地のように，棺でいっぱいになっています！ もううんざりです，正直なところ。

こうした中でも，私は仕事を続けているのです！ 昨日，やっとのことで，気の毒なブイエの序文を書き終えました。彼の散文の戯曲を手直しできるかどうか，これから考えてみます。その後で，『聖アントワーヌ』に取りかかる予定です。

ところであなたの方は，大切な先生？ ご家族の皆さんともども，どうなっておしまいです？

姪はピレネー地方に行っています。わたしはますます耳が遠くなっていく母と2人きりで暮らしています。それで，私の生活には楽しさが完全に欠けています。暖かい海岸へ出かけて半年の間，眠る必要がありましょう！ しかし，そうするためには，時間と金が不足しています。だから，削除を押し進め，がむしゃらに働かなければなりません。

8月の始めにパリに行きます。次いで10月一杯，『アイッセ』の稽古のために滞在します。私の休暇は8月の終り頃，ディエップで1週間ばかり過ごすだけです。以上が私の計画です。

ジュール・ドゥ・ゴンクールの埋葬は痛ましいものでした！

テオがおいおい泣いていました！

いつお目にかかれるでしょうか，結局のところ？

あなたを非常に強く抱擁します。

Gve. フロベール[4)]

〔手紙93〕 サンドよりフロベールへ

ノアン，〔18〕70年6月27日

あなたにまたひとつ新たな悲しみですね，お気の毒なあなた。私の方にも大きな悲しみがあります，私はバルベスの死を嘆き悲しんでいます，彼は私が崇拝する人々の1人であり，人類の良さを見直させる人間の1人でした。あなたは気の毒なジュールを悼み，哀れなエドモンに同情しておられます。あなたは彼を慰めるためにきっとパリにいらっしゃることでしょう。私は彼に手紙を書いたところです。あなたの友情がまたしても打

撃を受けたのですね。何という時代でしょう！

誰も彼も死んでゆきます，何もかも死んでしまいます，大地もまた，太陽と風にむしばまれて，死にかけています。こうした荒廃の真中で，まだ生きていく勇気をどうやって奮い起こせばいいのか，私には分かりません。最後まで愛し合いましょう。

あなたはごくわずかしか便りをくださいません，あなたのことが心配です。

G．サンド[5)]

〔手紙94〕 フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1870年〕 7月2日，土曜日，夜

大切なお優しい先生

バルベスの死は，あなたのゆえに，私を深く悲しませます。私たちはともに喪の悲しみを抱いているのですね。この1年来，何という死者の行列でしょう！ まるで頭を棍棒でめった打ちにされたように，私はぼうっとなっています。私を悲嘆に暮れさせているものは（われわれはなんでも自分本位に考えるものですから），私が向き合っているぞっとするような孤独です！ 私にはもう誰もいません，語り合える者が1人としていません。

「誰が今日，饒舌と文体に関心を抱こう？」

あなたとツルゲーネフのほかには，私の心をもっともとらえている事柄について心中を吐露できる人間を1人として知りません。それなのにあなた方はどちらも，遠くに住んでおられる！

とにかく，私は仕事を続けています，明日か明後日，『聖アントワーヌ』に取りかかることに決めました。しかし，息の長い仕事を始めるにはかなり昂揚した気持ちが必要ですが，それが私には欠けています。それでも，この常規を逸した仕事が直に私の心をとらえるだろうと当てにしているのですが？ ああ！ 私はみすぼらしい自分の姿，哀れな骸骨のことをもう考えたくはありません！ 元気ですよ，骸骨は。私は途方もなく眠ります。ブルジョアたちが言うように，「タフなのです」。

ブイエの仕事で8月にパリに行かなければなりません。その後，ディエップの姪の所で5，6日過ごします。こうしたことすべてが厄介で，大いに迷惑です。ちょっとした旅行は私には我慢なりません。私は容易に仕事を中断することも，仕事に取りかかることもできません。それから，『アイッセ』の稽古のために10月一杯，パリに滞在することを余儀なくされるでしょう。その後で，ここに戻り，冬の間中，動きません。以上が少

なくとも私の計画です。

母は元気です！　姪は夫とともにリュションにいます。私は最近，神学に関する退屈なものを読みました。それにプルタルコスとスピノザを少しまぜました。あなたに申し上げることはこれ以上，何もありません。

気の毒なエドモン・ドゥ・ゴンクールはシャンパーニュ地方の親類の家にいます。今月末にここにやって来ると私に約束しました。あの世で兄に再会する望みがこの世で兄を失った悲しみを慰めるとは思われません！

不死の問題について人々は空疎な言葉を弄して満足します。問題は，自己が持続するかどうか，知ることだからです。肯定することは，われわれの自尊心の傲慢さのように私には思われます。永遠の秩序に対するわれわれの弱さの抗議です。死はおそらくはわれわれに明かす秘密を生命ほどに持っていないのでしょうか？

何という呪いの年でしょう！　砂漠の中で迷ってしまったような気がしています。それでも私は敢然と立ち向かっています！　そして，毅然としているために驚異的な努力をしているのです，大切な先生，断言いたします。しかし，哀れな脳みそは時々，衰弱します。私に必要なのはただ一つ（そして，それは自分では与えられないものですが），なんらかの熱情を抱くことです！

あなたの前々回のお手紙はたいへん悲しいものでした。あなたもまた，偉大な方であるあなたも疲れを感じておられるのですね！　それでは，われわれはどうなるのです！

あなたを愛しているように，つまり，非常に強くあなたを抱擁します。

Gve. フロベール[6]

『ゲーテとエッカーマンの対話』を読み直したところです。まさに男です，このゲーテは！　だが，この男はあらゆるものを持っていました，あらゆるものを自分のために！

サンドの手紙が彷彿する〈容赦なく照りつける太陽の下で草木が枯れ，大地がひび割れていく〉光景[7]——サンド，フロベール，いずれの文章にあっても，創造のエネルギーを読み取ることは困難である。とりわけ，サンドの手紙にこれほどの疲労感がにじみ出るのは——信じ続けた理想が砕け，人類の明日への希望がこれほど希薄になっているのは稀である。

加えて，7月初め，フランス第二帝政の命運を決定する事件が出来（しゅったい）。

1868年の革命以後，空位になっていたスペインの王位に，プロイセン王ヴィルヘルムの親戚であるホーエンツォレルン家のレオポルト大公が候補になっていることが伝

えられ，フランス政府は東西からドイツの脅威を受けることになるとして，強硬に抗議。

7月3日，一新聞がこの立候補に対する激しい怒りを表明。

7月12日，レオポルト大公，立候補撤回。

7月13日，プロイセン宰相ビスマルク，「エムス至急公報」の偽造でフランスを挑発。フランスの世論，硬化。

戦争突入に対する不安や，開戦前夜の街にみなぎる不安定な，また熱に浮かされた雰囲気への言及を，この時期のサンドの『手帳』（*Agendas*）に繰り返し読むことができる[8)]。

7月15日，フランス政府，動員を決定。大通りに群がったパリの民衆は口々に「ベルリンへ！」と叫び，『ラ・マルセイエーズ』を歌ったという。

7月19日，フランス，プロイセンに宣戦布告。

開戦時，作戦遂行の準備がほとんどできていなかったフランス軍がまたたく間に，敗北を重ねることになる戦争であり，第二帝政の崩壊に一気に進むことになる戦争であった。

〔手紙95〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ，〔1870年7月22日，〕金曜日，夜

お変わりありませんか，大切な先生，あなたとご家族の皆さんは？　私の方は，同国人の愚かさに嫌気がさし，悲嘆に暮れています。「人類」の償いがたい蛮行に私の心は深い悲しみに充ちています。思想的な動機がまったくないこの熱狂をもう目にせずにすむよう，くたばってしまいたいほどです。

善良なフランス人が戦うことを望んでいます。第一に，プロイセンをねたんでいる故に，第二に，人間の自然状態は野蛮である故に，第三に，戦争はそれ自体に，群集を熱狂させる神秘的要素を含んでいる故に。

われわれは民族の戦争に立ち返ったのでしょうか？　私はそれを心配しています。準備されている恐ろしい殺戮（さつりく）にはたった一つの口実さえありません。戦うために，戦いたいだけです。私は遮断された橋，壊されたトンネル，失われたあらゆる人間の仕事に涙

を流します，結局のところ，あまりに徹底的な否定です。

平和会議は今のところ，間違っています。文明は私には遠くに見えるのですが？「人間は人間に対して狼である」と言ったホッブズは正しかったのです。

ここのブルジョアたちはもうじっとしていません。プロシャがあまりに不遜であったと彼らは考え，「復讐」を望んでいます。あなたもご存知のように，とある紳士*が議会でバーデン大公領の略奪を提案しましたね！　ああ！　ベドウィン人の中で暮らすことができるものならば！

私は『聖アントワーヌ』を始めました。私が戦争のことを考えなければ，きっとかなり順調に進むことでしょう。

あなたの方はいかがですか？

母はディエップのカロリーヌのもとにいます。私は長い間，クロワッセで一人っきりです。わずかに暑くなっています。しかし，私はネズミイルカのようにセーヌ河で遊んでいます。

あなたを非常に強く抱擁します，大切なお優しい先生。

Gve. フロベール[9)]

＊　ケラトリー伯爵。

〔手紙96〕　サンドよりフロベールへ

ノアン，〔1870年〕7月26日

私はこの戦争が卑劣であり，許可された『マルセイエーズ』*は冒瀆だと思います。人間は残忍で，虚栄にみちた畜生です。われわれはパスカルの言う，2倍も少ない進み方をしています。かつてなかったほど遠くに行くのはいつのことでしょう？**

当地は，日陰で40度や45度の暑さです。森が焼かれます。また別の残忍な愚行です。狼が家の庭を徘徊しに来ますから，夜，モーリスはピストルで，私は角灯で追いはらうのです。木々の葉が落ちます。おそらくは命も。飲み水が不足しましょう。収穫はほとんど皆無です。それなのに戦争です。何という幸運！　農業は滅び，飢饉のおそれがあります。それでもわれわれはプロイセン人を打ち破ることでしょう。マルボローは戦場に赴く，というわけです！

仕事をするには昂揚した気持ちが必要だとあなたはおっしゃいましたが，そのとおりです。この呪われた時代，それをどこに見つければいいのでしょう？　幸いなことに家

には病人はいません。モーリスやリナが行動し，オロールとガブリエルが遊んでいるのを目にするとき，私はすべてを失ってしまう不安をかこつことはできません。

あなたを愛しています，大切な方。家族の皆があなたを愛しています。

あなたの吟遊詩人

G．サンド[10)]

＊　1870年7月14日，皇帝の特別の許可により，オペラ座で『ラ・マルセイエーズ』が歌われ，観客を熱狂させた。

＊＊　『パンセ』355（ブランシュヴィック版）。

スペイン王位継承問題に端を発した，プロイセンとの外交関係で大きく傷ついたフランス国民の自尊心。沸騰する愛国主義の波に抗しがたく引きずられ，呑み込まれていく同国人たちのおぞましい狂熱の姿――フロベールは彼の懐疑的な人間観をまさに裏書きし，強固にしさえする，このフランス社会に充満する愚劣さ，盲信に対する果てしない憤怒を，そして，民族間にかってない規模で始まろうとしている殺戮への不安な予感を，遠く離れた友に書き送る。

〔手紙97〕　フロベールよりサンドへ

クロワッセ，〔1870年8月3日，〕水曜日

なんですって，大切な先生？　あなたもまた！　意気阻喪して，悲しんでおられるのですか？　それでは，意志薄弱な人間はどうなるのです？

私は，自分でも驚くほど，胸が締めつけられています。私は仕事や，気晴らしとなってくれるはずの善良な聖アントワーヌにもかかわらず，底なしの憂うつの中をのたうち回っています。これは度重なる悲しみの結果でしょうか？　そうかもしれません。しかし，戦争が大いに関係があります。われわれが暗闇の中に入ってゆくように私には思われるのですが？

これがまさしく本来の人間なのです！　今こそ理論を打ち立てるがいい！　「進歩」を，知性を，そして「大衆」の良識を，フランス国民の温和さを褒めそやすがいい！　断言しますが，今，もし誰かが「平和」を説くことを思いつきでもしたら，その人間は殴り殺されることでしょう。

どんなことになろうと，われわれは長い間の後退をしたのです。

民族間の戦争がおそらく再び始まるのではないでしょうか？　1世紀経たないうちに，何百万の人間がたった一度の会戦で殺し合うのでしょうか？　全ヨーロッパに対して全東洋が，新世界に対して旧世界が戦う！　どうしてそうでない訳がありましょう！　スエズ運河のような，集団で行う大規模な土木事業はおそらく別の形を取った，われわれの想像を絶したこのおぞましい紛争の下書きであり，準備なのでしょう。

また，おそらく，プロイセンはヨーロッパの均衡を回復させるために，神の思召(おぼしめし)としてこっぴどくやられることでしょう。この国はルイ十四世やナポレオン治下のフランスと同様に，肥大する傾向を見せていました。他の器官がそのために苦しんでいます。そこから世界的混乱です。途方もない瀉血が有効でしょうか？

ああ！　われわれは教養があるというのに！　人類はわれわれの理想からかけ離れています！　そしてわれわれの計り知れない過ち，重大な結果をもたらす過ちは，人類をわれわれと同じようなものと信じ，それ相応に扱おうとしていることです。

普通選挙に対して人々が抱いている尊敬，盲目的崇拝は教皇の不謬性（ついでながら，最近，手ひどく影響力を失いました。気の毒に！）以上に私を憤慨させます。フランスが要するに群集に統治されずに，中国風高級官吏の支配下にあったとすれば，こんなことにはならなかったとお思いですか？

下層階級を啓蒙しようなどと思わずに，上流階級を教育することに専念していれば，ケラトリー氏がバーデン大公領の略奪を提案することもなかったでしょう，国民はこの方策をきわめて適切なものと判断しているのです。

近頃，プリュドムを研究しておられますか？　途方もない人間です！　彼はミュッセの『ライン河』*を賞賛し，ミュッセが「他に何をしたか」と言っています。ミュッセは今や国民詩人です！　ベランジェをしのいでいます！　なんと途方もないこっけいさでしょう……すべてが！　しかし，愉快なところのほとんどないこっけいさです。貧窮の兆しがはっきりあります。私を手始めとして，誰も彼もが不如意です！　しかし，われわれはきっと快適さと平穏に慣れすぎていたのです。われわれは物質の中にはまり込んでいたのでしょうか？　大いなる伝統に立ち返り，もはや「生命」にも「幸福」にも，お金にもいかなるものにも執着しないことが必要です，われわれの祖父たちがそうであったような存在，軽やかで，気体のような人間であるべきです。

昔，人々は空腹で死にそうになりながら，その人生を過ごしました。同じ展望が水平線上に現われています。哀れなノアンについてお知らせくださったことはおぞましいものです！　こちらの田舎はあなたの地方ほどには被害を受けませんでした。

明後日，ディエップに行きます。母が孫娘の家にいます。母は年を取り，ぞっとするほど衰弱しています。この点に関しても，私にとって前途は面白いものではありません。

月曜日，パリに行きます。したがって，ムリーリョ街4番地に手紙をください。ほぼ1週間滞在する予定です。『アイッセ』がどうなるのか知る必要があります。それに，ブイエの詩集です。このことで，かの善良なミシェル・レヴィに再び会わなければなりません。

ところで，われわれはいつ再会できるのでしょう？

皆さんによろしくお伝えください，そしてあなたには心からの愛情を込めて。

Gve. フロベール[11)]

＊『ドイツのライン河』は，宣戦布告の数日前，オペラ座で国民軍中隊長の軍服を着た俳優により朗読された。

8月3日，サンドは前日のザールブリュッケンの攻撃について，《陛下は自国の大砲に満足なのか？　死者など問題ではないのだ。野蛮人同志で有頂天になっている。何という文明！》[12)]と抑えられぬ憤りを『手帳』に書きつけたが，さらに翌々日の5日には，《1日の砲弾の詳細。ああ！ヨーロッパ最大の殺人鬼の国民であることを何と誇らしく思っていることか！》[13)]と悲痛な思いをほとばしらせた。

8月6日，マクマオン，フロサールの敗北。

《不吉な一日，四方から気が滅入るニュースが届く。将軍たちの敗北。フランスの地にプロイセン軍がいる。敗北のときまで頑強に否定され続けたニュース。混乱し，憤激するパリ。証券取引所発表の偽りの勝利が痛ましい情報で打ち消される。》[14)]

（『手帳』8月7日）

同じ日，フロベールに宛てた手紙は，農民に囲まれて暮らしてきたジョルジュ・サンドの思想の，いわば根幹にあるものを鮮明に浮かび上がらせる。

〔手紙98〕　サンドよりフロベールへ

ノアン，〔1870年8月7日，〕日曜日，夜

この動乱の真っ最中に，あなたはパリにいらっしゃるのですか？　絶対的な支配者たらんとする国民は何という教訓を受け取ることでしょう！　自分たちに理解できない問

題のために殺し合っているフランスとプロイセン！　今やわれわれはとてつもない災厄に見舞われています，たとえわれわれが勝利者になろうとも，こうしたことすべての果てに，どれほどの涙が流されることでしょう！　目に入るのは，出征する子供たちに涙を流す貧しい農民ばかりです。遊撃隊がここに残っていた者を連れて行きます，差し当たり，どのように彼らを扱うことでしょう！　すべてを飲み込み，すべてをむさぼったにちがいないこの軍隊の行政部にはなんという混乱，なんという無秩序が見られることでしょう！　このおぞましい経験が最後には世界に対して，戦争は撤廃されるべきであること，さもなければ，文明は必ず滅びることを明らかにするでしょうか？

われわれは今晩，ここに至った，つまり，敗北したのです。おそらく明日は，われわれが打ち負かしたと知らされましょう。相方に，一体，どんな優れたもの，有用なものが残るというのでしょう？

何もかもを壊した恐ろしい嵐の到来で，やっと当地に雨が降りました。農夫は牧草地を耕し，元の状態に戻します，悲し気にであれ，陽気にであれ，いつも変らず，地面を掘っているのです。愚かだと人は言います。否，繁栄の中では子供ですが，災厄の中では一人前の男，愚痴をこぼすわれわれ以上に大人なのです。農夫は何も言いません。そして，人々が殺している間，他方で破壊されているものをいつも修復しながら，種子を蒔いているのです。私たちは彼らのようにやってみようと思います。そして，地下50メートルか，100メートルで，泉の湧き口を探してみるつもりです。技師がここに来ています，モーリスが彼に地質学を教えています。地上で起きていることを忘れるために地球の胎内を探してみるのです。とは言っても，この悲嘆から気を紛らせることはできません！

どこにいらっしゃるのか，知らせてください。この手紙はあなたが指定なさった日に，ムリーリョ街に送ります。私たちは皆，あなたを愛しています，そして，抱擁します。

G．サンド[15)]

中部フランスの緑濃いベリ地方ノアンで，農民の子どもたちと遊び，夏の庭には〈麻打ち〉たちの語る不思議な話に心ひかれた少女の頃より，生涯の多くの時を過ごし，農民の暮らし，彼らの喜びや哀しみ，農作業の四季を熟知していたジョルジュ・サンドの視野の中心にあるのは農民たち――プロイセンとの愚劣きわまりない戦争の災禍を想うときにも，文明の滅亡の可能性が頭を過ぎるときにも，夫や息子を涙で戦地に送り出した後は，その感情を覆い隠して，まるで何事もなかったかのように黙々と畑を耕す農民たちである。[16)]

一方，騒乱の最中のパリで数日を過ごし，人々の狂熱を目の当たりにしたフロベールの手紙には，これまでにも増して露呈した人間本質のおぞましさに対する絶望に近い言葉が綴られる。だが，この17日付の手紙は同時に，このフロベールまでもが，次第に戦時体制に組み込まれていく状況を映し出す。

〔手紙99〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ，〔1870年８月17日，〕水曜日

月曜日にパリに着き，水曜日に発ちました。いまやパリの人間の本質がわかりました！そして心の中で，93年の最も凶暴な政策に詫びました。いまこそ理解できます！ なんという愚かさ！ なんという卑劣さ！ なんという無知！ なんという思い上がり！

私は同国人たちに吐き気を催します。彼らはイジドールと同じ袋に入れるに値します。

この国民はおそらく懲らしめられるべきでしょう？ 私はそれを心配しています。

何であれ私には読むことができません，いわんや書くことはできません。皆と同じようにニュースを待って時を過ごしています。ああ！ 母がいなければ，私はすでに出征していたことでしょう！

何をして過ごせばいいか分からないので，私はルーアン市立病院に看護士として志願しました，私の協力もおそらく無用ではないでしょう。兄にはもはや弟子がいないからです。無為でいることに私は息が詰まり，爆発しそうです。

もしパリが包囲されれば，私は発砲しに行きます。銃の準備はできています。しかし，その時まではクロワッセにとどまります，とどまっていなくてはなりません。いずれ，その理由をお話しいたしましょう。

首都でおぞましい行為を目にしましたが，これは人間を老けさせます。

それにまだほんの第１幕なのです，われわれはこれから「社会主義共和国」に入るのですから。その後に激しく，長い反動が続くことでしょう！

以上が「普通選挙」がわれわれを導いた状況です，この新しい神も古い神と同じように愚かだと私は思います！ 大したことではありません！ あなたはこれが解体されるとお思いですか，この結構な「普通選挙」が？ とんでもありません！ イジドールの後には〝下品な人間〟一世が出て来ますから！

この戦争で私を悲嘆に暮れさせているのは，プロイセン人が正しいことです！ 今度は！ 次にはロシア人が！ ああ！

こうしたすべてをもう考えずにすむよう，私はくたばってしまいたいものです！

ノアンでは当地ほど金銭的にお困りではないでしょう。セーヌ＝アンフェリュールの労働者たちは皆，数日後には施しを求めることになるでしょう。甥のコマンヴィルは勇敢に振舞っています。それでも，身内の者を働かせていますよ。兄は患者を投げ出して，専ら公務にかかわっています。ルーアンは防備を強化し，自前で遊撃隊を維持しています。これはまだどこの市町村も考えついていないことです。

哀れな文学はすっかりうっちゃられています，大切な先生。『聖アントワーヌ』は14ページ書いただけです！　進めることができません。

モーリスはどこにいるのです？

消息を頻繁にお知らせください。私の代りにあなたのお孫さんたちを抱擁してください。

敬具

Gve. フロベール[17]

9月2日，ナポレオン三世自らが指揮する8万3,000人の軍隊がスダンで，プロイセン軍に包囲され，皇帝，捕虜となる。

9月4日，スダン敗北の知らせがパリに届き，革命勃発。血が流されることなく，反対が叫ばれることなく，パリ市庁舎で共和政が宣言され，帝政は崩壊した。

30年来，共和主義者を標榜してきたジョルジュ・サンドにとり，この共和政樹立の知らせは思いがけぬ大きな喜びであり，閉塞状態の打開を期待させるものであった。

9月5日の『手帳』には，長らく忘れていた歓喜，昂揚した精神がみなぎる。

《モーリスが「パリで難なく共和政が宣言された，人民の歴史の中で途方もなく大きな，比類のない事件！」と言って，私の目を覚ました。この自由はまさしく，文明化された国民の正常な状態，あるべき状態！　人民による人民の政府！（…）この政府は，一滴の血も流されることなく，今日，誕生した。持続しないだろうか？　期待しよう！　プロイセン軍を撃退するだろうか？　彼らが平和条約を締結しないなどとは！　戦闘を一時中断しないなどとは！　神がフランスを護らんことを！　フランスは再び神のまなざしにふさわしいものとなったのだ。》[18]

だが，翌日には早くも，プロイセン軍がパリに向かっているという，厳然とした現実を突きつけられ，ジョルジュ・サンドは打ちのめされる。落胆，深い失望は覆うべくもない。

《昨日一日が生き生きとしていたと同様に，打ちのめされた一日。(…)人々は，おそらく明日にもパリに入るであろうプロイセン軍のことを考えている。彼らの進軍は速い，彼らを止めるものはもはや何ひとつない。パリを救うために一体何ができよう？　何かを組織するにも時間がない，防備を施す資材があるだろうか？　私にはあらゆるものが不足しているように思われる。》[19]（『手帳』9月6日）

不気味に進軍を続けるプロイセン軍。防御の策はおろか，正確な情報さえなく，混乱と恐怖を昂じさせてゆくパリ，そしてフランス――サンドの『手帳』は簡潔な，だが力強い筆致で，犠牲となる両軍の兵士やその家族，軍靴に踏み荒らされる畑，砲火を浴びる街に対する悲痛な思いを伝えると同時に，戦時下の〈空気〉を実に見事に再現する。

〔手紙100〕　フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1870年9月10日，〕土曜日

大切な先生

われわれはいまや「深淵の底」にいます，不名誉な和平はおそらく受諾されないでしょう！　プロイセン人はパリを破壊しようとしています，それこそが彼らの夢なのです。われわれの唯一の，もっともな望みは化学にあります。あり得ぬことではありません。新たな，防衛手段が多分，見出されたのではないでしょうか？

私はパリ攻囲が目前に迫っているとは思いません。しかし，パリに屈服を強いるために，彼らは，1．大砲の出現でパリを震え上がらせ，2．周辺の地方を荒廃させましょう。

ルーアンではこうした紳士諸氏の訪問を覚悟しています。そして，私は(日曜日から)中隊の中尉ですから，部下を訓練し，戦術の講習を受けにルーアンに行きます。

嘆かわしいのは，徹底防戦を主張するものと，どんな代価を払おうとも和平を求めようとするものと，意見が対立していることです。私は悲しみのあまり，死にそうです。

わが家はなんという有様でしょう！　14人がうめき声を上げ，いら立っています。

私は女たちを呪います！　われわれが滅びるのは女たちのせいです！

私はパリが間もなくワルシャワと同じ運命をたどることを覚悟しています。

そしてあなたは，共和国に対するあなたの熱狂で私を深く悲しませておられる！　明白きわまりない「実証主義」にわれわれがまさに打ち負かされたとき，どうしてあなた

はまだ「幻想」を信じることがおできになるのです！　何が起ころうとも，今，「権力」の座にある人々は犠牲にされましょう。そして共和国には彼らと同じ運命が待っていましょう。いいですか，私はこの哀れな共和国を防衛しています。しかし，私はそれを信じてはいないのです。

昨日，ディエップでデュマに会いました。金で5100万を盗んだとして責められている妃に対する愚かしい中傷を阻むために，彼と意見を一致させようとわざわざ出かけたのです。

妃が清廉潔白にフランスを出たとしても，弟君についても同様というわけにはいきません。戦争が始まるや，ムドンの城の木々を自分の利益のために伐採し，売らせたのですから！　途方もないことではありませんか！

バダンゲはばかで，愚かです（愚かになったのでしょうか？）「武器なくして，食糧なし！」と機械的に繰り返しているのですから。皇太子は死にかけています。

この詳細はトロシュ夫人から（間接的に）知らされました。

以上が，今，あなたに申し上げたいことのすべてです。他にもたくさんあるのでしょうが，気がかりなことがあるのです。まるで私を目掛けて押し寄せる瀑布，大河，大洋のようです。これ以上苦しむことは不可能です。ときどき，私は発狂するのではないかと心配になります。

母の顔に目を向けると，すべての気力が失われます。ときどき，私がどんな願をかけるか，あなたに申し上げる勇気がありません。

これが，真理を見ようとしない「熱狂」，まがいものと悪ふざけへの好みが引き起こした結果です！

われわれはポーランドのように，ついで，スペインのようになりましょう。それから次はロシアに食われるプロイセンの番でしょう。

私は自分をもう終わった人間と考えています。私の脳はもう回復することはないでしょう。自分の価値が評価できなくなったとき，書くことはもはやできません。私が求めているのはただ一つ，つまり，安らかであるために，くたばってしまうことです。

さようなら，大切な先生。とりわけ，私を慰めないでください！

私に残っている愛情を込めてあなたを抱擁します。私の心が無感動になった気がします。私は愚かで，冷たい人間になってしまいます。

それでもまだあなたに

G.[20]

帝政の崩壊，そして共和政の樹立を率直に喜ぶ共和主義者サンド。ナポレオン三世

に対してばかりか，帝政に対しても容赦ない言葉を投げはしたものの，共和主義陣営には決して与することのなかったフロベール。歓喜するサンドへの遠慮のない言葉の底にフロベールの苛立ちを見て取るのは容易である。

9月19日，プロイセン軍，パリを包囲。

〔手紙101〕 フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1870年9月28日，〕水曜日

私はもう悲しくはありません。昨日，『聖アントワーヌ』にまた取りかかりました。仕方がありません，慣れなくてはなりません！　人間の自然状態があるところに，つまり，悪に慣れなくてはなりません。

ペリクレスの時代のギリシャ人は，明日の食べものを気にかけずに芸術を行いました。ギリシャ人になりましょう。しかしながら，正直なところ，大切な先生，私は自分がむしろ「野蛮人」であると感じています。私の祖先であるナチェス族かヒューロン族の血が教養人の私の血管の中でたぎっています，そして私は真剣に，単純に，動物的に戦いたいのです。

私に説明してください！　今，平和条約を結ぶという考えは私を激怒させるのです。パリにプロイセン人が入って来るのを目にするより，(モスクワのように)パリを焼き払う方がいいでしょう。しかし，そこまでには至っていません。情勢が変わっているように私には思われるのですが？

プルタレス夫人の話をご存知ですか？　立派ですね。フランスの背徳はなんと高くつくことでしょう！

まさしく模範である兵士たちの何通かの手紙を読みました。このようなものが書かれる国は飲み込まれはしません。フランスは……骨組みのしっかりした「駄馬」のようなものです，やがて，真価を明らかにするでしょう。

何が起ころうとも，新しい世界がやがて始まります。とはいえ，私は新しい風習に順応するには自分が老いすぎていると感じます。

甥のコマンヴィルは軍隊のために，仮兵舎は別にして，毎日，1千個の乾パン用の箱を作っています。こちらでは人々が無為に過ごしていないことがお分かりでしょう。パリは活力にあふれています。そして，食糧に。その点に関しては，すべて確かです。

ああ！　どれほどあなたが懐しく思われることでしょう！　どれほどあなたにお目にかかりたいことでしょう！　皆さんを抱擁します。

あなたの老吟遊詩人

Gve. Fl.[21]

こちらでは，もしヘーゲルの同国人たちがパリを攻囲するようなことになれば，皆でパリに向かうことを決めています。あなたのベリ人たちを興奮させるよう努力してください。敵が「よそ」の国で「飲んだり，食べたりする」のを防ぐために，「親愛なる好色漢たち，私のところへいらっしゃい」と彼らに向かって叫んでください。

（私は期待しているのですが）戦争は「権力者たち」に大きな打撃を与えたことでしょう。近代社会から否定され，紛砕された個人は再び重要になるでしょうか？　それを望みましょう！

フロベールが9月4日，クロワッセの国民軍中尉に任ぜられ，《部下を訓練し，戦術の講習を受け》ていることは，9月10日付の手紙ですでに読んだ――9月14日にはロジェ・デ・ジュネット夫人に同様の言葉で報告している[22]――が，このフロベールもまた，フランス社会に渦巻き始めた愛国主義的熱狂にとらわれてきたことを，9月28日付の手紙がうかがわせる。前日，姪のカロリーヌに宛てた手紙も示唆的である。[23]

〔手紙102〕　フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1870年〕10月11日，火曜日

大切な先生

まだ生きておられますか？　どこにおいでなのです，あなたやモーリスや他の方々は？

私は自分がどうして死ななかったのか分かりません，それほどこの6週間，七転八倒の苦しみをなめています。

母はノジャンの人々と一緒にルーアンに避難しました。姪はロンドンにいます。兄は市政に専念しています，そして私は，ここでただ一人，無力さと悲しみに苦しんでいます！　断言いたしますが，私は善を実行しようと思いました，しかし，無理でした！

なんという窮乏でしょう！　今日，私の戸口に271人の貧しい人々がいました。皆に施しをするのです！　今年の冬はどうなるのでしょう！

プロイセン人は今，ルーアンから12リューの地点にいます！　それなのにわれわれには指示も，命令も，規律もありません。何も，何もありません。ロワールの軍隊にわれ

われはだまされ続けています！　今，どこにいるのです？　あなたは何かご存知ですか？　中部フランスでは何をしているのでしょう？

パリは結局，飢餓に苦しむことになりましょう。それなのに何一つ援助がないのです！

共和国の愚かさは帝国の愚かさ以上です。何かおぞましい喜劇が陰で展開しているのでしょうか？　どうしてこれほど無為なのでしょう？

ああ！　私はどんなに悲しいことでしょう！　ラテン世界は崩壊寸前にあるような気がします。われわれであったものは何もかも消え失せます！

私は気晴らしに，パトロールと国民軍の訓練をしているのです！！！

さようなら，大切な，お優しい先生。あなたにもっと長く書くことができません。お便りをください。施しになりましょう。

あなたを抱擁します。

Gve. Fl.[24]

〔手紙103〕　サンドよりフロベールへ

〔ラ・シャトル，1870年10月14日〕

私たちは生きていますよ，ラ・シャトルにいます。ノアンでは複雑で，恐ろしい天然痘が猛威を振るっているのです。私たちを迎えに来てくれたクルーズ県の友人の家に子供たちを連れて行かなければなりませんでした。そこで3週間を過ごし，家族が3か月の間，住める家を探しましたが，見つけられませんでしたよ。南仏の友人が私たちを招き，宿を申し出てもくれましたが，私たちはこの地を離れたくなかったのです。ここでは，どのように行動すべきかまだよく分からないとはいうものの，明日にでも役に立てますからね。というわけで，私たちは見捨てたわが家に一番近い友人の家に戻って来ました，そして機会を待っているのです。

地方における共和政の樹立にどれほど危険がひそみ，混乱があるかは言うまでもありません。幻想を抱くことはできません。一か八(ばち)かの勝負です，行き着くところはおそらくオルレアン家擁立主義でしょう。けれどもわれわれは予期せぬ事態にあまりにも追いやられていますから，見通しを立てることは大人げないように私には思われます。問題は目前に迫った敗北を免れることです。それが不可能であると言わないことにしましょう，そんな風に考えないことにしましょう。フランスに失望することのないように。何が起ころうとも，フランスは自らの狂気の償いをしているのです，フランスはよみがえりましょう。われわれは命が奪われるかもしれません。肺炎で死ぬのも，砲弾で死ぬの

も，死ぬことに変りありません。同胞を呪うことなく死んでゆきましょう！

私たちはあなたを変らず愛しています。皆があなたを抱擁します。

G．サンド[25)]

戦局は日を追って悪化。
10月27日，メッツ陥落。

〔手紙104〕 フロベールよりサンドへ

〔クロワッセ，1870年11月〕27日，日曜日，夜

私はまだ生きています，大切な先生。だからと言って，ましになったのではありません，それほど私は悲しんでいるのです！ もっと早く手紙を書かなかったのは，あなたからのお便りを待っていたからです。あなたがどこにいらっしゃるのか分からなかったのです。

6週間前から当地では日を追ってプロイセンの紳士たちのご訪問を待ち構えています。遠くで大砲の音が聞こえるような気がして，耳をすまします。彼らは半径15リューから20リュー圏内でセーヌ＝アンフェリュール県を包囲しています。彼らは徹底的に荒廃させたヴェクサン地方を占領していますから，もっと近くにさえいます。なんという残虐行為！ 人間であることが恥ずかしく思われるほどです！

もしわれわれがロワール川流域で勝利すれば，彼らの出現は遅れましょう。しかし，われわれは勝利するでしょうか？

私に希望が湧いてくると，なんとかしてそれを押し返そうとしています，しかし，私自身の奥底で，すべてを無視して，それを少しだけ，ほんの少しだけ持ち続けることを禁じ得ないのです！

フランスに私以上に悲しんでいる男がいるとは思いません！（すべては人々の感受性にかかっています）。私は悲しみで死にそうです。これこそが真実です。慰めの言葉に私は苛立ちます。私を失望させるのは，1．人間の残忍さ，2．われわれがばかげた時代に入ろうとしているという確信，です。人々は営利主義者に，軍人に，アメリカ風に，そして，カトリック教徒になるでしょう。熱心なカトリック教徒に！ 見ていてごらんなさい！ プロイセン戦争はフランス革命を終わらせ，それを破壊します。

だが，もしわれわれが戦勝者であれば，とあなたは私におっしゃることでしょう！ こうした仮定は歴史上のあらゆる先例に反しています。どこで南部が北部を打ち負かし，

カトリック教徒がプロテスタントを支配したことがありましょう？　ラテン民族は死に瀕しています。フランスはやがてスペインやイタリアの跡をたどりましょう。げす根性（ビニュフリズム）が出現しています！

なんという崩壊！　なんという失墜！　なんという悲惨！　なんという忌まわしい行為の数々！　今，起きているあらゆることを眼前にして，進歩や文明が信じられるでしょうか！　「科学」が何の役に立つというのでしょう，学者にあふれた，この国民がフン族にこそふさわしい忌まわしい行為を行っているのですから！　いや，フン族の行為よりもっと悪い！　組織的で，冷酷で，計画的で，熱情や「飢餓」という理由がないからです。

なぜ彼らはかくも激しくわれわれを憎悪するのでしょう？　あなたは4千万人の憎しみに押しつぶされているとお感じではないのですか！　この途方もなく大きな地獄の深淵に私はめまいがします。

紋切り型の空言には事欠きません。「フランスは復興しよう！　絶望してはいけない，これは有益な懲罰だ，われわれは実際にあまりに不道徳であった！」等。おお，お決まりのでたらめ！　いいえ！　このような打撃から立ち直りはしません！

私は骨の髄まで打ちのめされているのを感じます。もし20歳若ければ，おそらくこうしたことは一切，考えなかったでしょう。また，もし20歳余計に年を取っていれば，あきらめて受け入れたことでしょう。

哀れなパリ！　私は雄々しいと思います。しかし，たとえわれわれが再び目にするとしても，それはもうわれわれのパリではないでしょう！　私がこの街に持っていた友人はすべて死に，また，散り散りになりました。私にはもう中心がありません。文学は無意味で無用なものに私には思われるのです！

もう一度それに携わることができる状態に果たしてなるでしょうか？

何かに専念することが今の私にはできません！　暗く，また，心身をさいなむような無為の中で日々を過ごしています。姪のカロリーヌはロンドンにいます。母は刻々と年を取ってゆきます！　私は田舎の孤独から逃げるために，月曜日から木曜日まで，母と一緒にルーアンで泊まります。それからここに戻ってきます！

おお！　軍服をもはや目にすることのない国に，太鼓の音が聞こえない国に逃亡することができるのであれば！　虐殺のうわさが流れない国，市民であることが強制されない国に！　しかし，哀れな高級官吏（マンダリン）にとって地球はもはや住むべきところではありません！

さようなら，大切なお優しい先生。私のことを思って，手紙を書いてください。もしあなたが私の近くにいらっしゃるのであれば，私はもっと毅然としているだろうにと思

います。私の代わりにご家族の方々を抱擁してください。そしてあなたには老吟遊詩人の無数の愛を込めて

Gve. Fl.[26]

《骨の髄まで打ちのめされた》と感じるフロベールが，呻きのように呟いた《私にはもう中心がありません。文学は無意味で無用なものに思われます》という言葉は何と雄弁に〈生の支柱〉を失ったフロベールの虚ろな内面を伝えることか。

12月5日，ルーアン降伏。

クロワッセのフロベールの家に10人の兵士が宿営。

たとえば，12月18日付のカロリーヌへの手紙が端的に示すように[27]，フロベールの苦しみ，悲憤は頂点に達した。

1871年1月5日，パリ砲撃開始。

厳しい寒さと飢餓に苦しめられ，1月18日，パリ降伏。同じ日，ヴェルサイユ宮殿において，プロイセン国王（ヴィルヘルム1世），ドイツ皇帝となる。

1月28日，休戦協定締結。

〔手紙105〕 サンドよりフロベールへ

ノアン，〔18〕71年2月4日

それではあなたは私の手紙を受け取っておられないのですね？ どうかただ一言（ひとこと），「元気です」と書いてください。私たちはひどく心配しています！

パリでは皆，元気です。

私たちはあなたを抱擁します。

G．サンド[28]

〔手紙106〕 フロベールよりサンドへ

ディエップの近くヌーヴィル

〔1871年〕 2月15日水曜日

大切な先生

今し方，4日付のお手紙をいただきました。他のお手紙は届いておりません。私のこの手紙はお手許に果たして届くでしょうか？　疑わしく思われます。

私はまだ生きています。ただそれだけです。けれども，嘆くような個人的不幸は何もありません。

あなたとご家族に心からの愛を。

老吟遊詩人

手紙を交わせるようになり次第，便りをいたします。近々，パリでお目にかかれることを期待いたしましょう――哀れなパリ！ではあっても……[29]

2月26日，ヴェルサイユで仮講和条約調印。50億フランの賠償金に加えて，アルザス・ロレーヌ両地方がドイツに割譲されたことは周知のとおりである。

3月1日，ドイツ軍，パリに入城し，シャンゼリゼ大通りを行進。

フロベール，サンド相方にとり，苦い幻滅にみちた戦争の結末であった。

〔手紙107〕　フロベールよりサンドへ

ディエップ，〔1871年〕3月11日

大切な先生

いつ再会できるのでしょうか？　パリは私には面白そうに思われませんが？　ああ！一体どんな世界にこれからわれわれは入ることでしょう！　異教（パガニズム），キリスト教，俗物主義，以上が人類の三大進展です。第3段階の始めにいるのは悲しいことです。

9月以来，私が苦しんだことを残らずあなたにお話することはいたしません！　どうしてくたばらなかったのでしょう？　まさにそのことに私は驚いています！　私以上に絶望した人間はいません。なぜなのでしょう？　これまでの人生でつらい時期がありました，大切なものを喪失しました，多くの涙を流し，多くの苦悶を飲み下しました。ところで，積み重ねられた，こうした苦しみも，今度の苦悩に比べればなんでも，まったくなんでもありません。私が立ち直ることはありません！　自分を慰めることはできません！　私にはどんな希望もありません。

私は自分が進歩主義者で人道主義者だとは思っていませんでした。それでも，私は幻

想を抱いていました！　なんという野蛮さ！　なんという後退！　私に12世紀の粗野な人間の感情を与えた同時代人たちを私は恨みます！　私は憎悪で息が詰まりそうです！白い手袋をしてガラスを割り，サンスクリットを知りながら，シャンパンに殺到し，時計を盗んでおいて，名刺を送ってくるこの将校たち，金のためのこの戦争，これら野蛮な文明人たちは「人食い人種たち」以上に私をぞっとさせます。そして誰も彼もが彼らの真似をし，兵士になろうとしています！　ロシアはいまや400万の兵士を擁しています。全ヨーロッパが軍服に身を包むことでしょう。もしわれわれが報復に出れば，それは極度に情け容赦のないものとなりましょう。そして，いいですか，人々はすぐにそのことしか，ドイツに復讐することしか考えなくなるでしょう！　政府は，いかなるものであれ，この熱情に付け込むことでやっと維持されましょう。大規模な虐殺がわれわれのすべての努力の目標に，フランスの理想になろうとしています！

私は次のような夢を胸に秘めています。平穏な国で太陽の光を浴びて暮らすこと！

新たな偽善を覚悟しましょう，美徳についての仰々しい演説，腐敗に対する攻撃，簡素な服装，等々，申し分のない品のなさです！

現在，クロワッセの家に40人のプロイセン人がいます。私の哀れな住居（今，それがひどく嫌いになっています）があいて，清潔になり次第，そこに戻ります，それから，衛生状態の悪さにもかかわらず，多分，パリに行きます。そんなことはちっとも問題ではありません！

ご家族の皆さんによろしくお伝えください。　敬具

あなたの老吟遊詩人

Gve. Fl.[30]

晴れやかな気持ちではありません！

〔手紙108〕　サンドよりフロベールへ

ノアン，〔1871年〕3月17日

11日付のお便り，昨日受け取りました。

私たちは皆，これまでの人生のどんな時代にもまして，精神的に苦しみましたし，この傷はいつまでも痛むことでしょう。野蛮な本能が優勢になる傾向があるのは明らかです。けれども，私はもっと悪い本能を恐れています。つまり，自己本位の，臆病な本能です。報復を求めはするものの，姿を隠している偽の愛国者たち，過激共和主義者たち

のおぞましい腐敗です。強烈な反動を求めているブルジョアたちにとって格好の口実です。われわれは復讐心が強くさえないことを私は心配しています。それほど臆病でもあるこうした空いばりがわれわれに嫌悪感を抱かせ，まるで王政復古の時代のように，あらゆることに耐え，休養することだけを求めて，その日暮らしをするようわれわれを駆り立てましょう。やがて覚醒があるでしょう。私はもうこの世におりません，そして，あなたの方は，老人になっていますね！　どこか静かな国に出かけて，太陽の下で暮らす！　それはどこです？　文明に対する野蛮のこの闘い，世界に広まろうとしている闘いの中でどの国が平穏でしょう？　太陽それ自体が神話ではありませんか？　それが隠れていようと，あなたを焦がそうと。この不幸な惑星の上ではこんな状況です，それでも，この惑星を愛し，ここで苦しむことに慣れましょう。

われわれが危機に陥っていた間，私は日々，印象と考えを書きとめました。『両世界評論』誌にこの日記が掲載されます。これをお読みになれば，生活が至るところで，戦争に巻き込まれなかった地方でさえも，徹底的に打撃を受けたことがお分かりになりましょう。それから，私が，非常にだまされやすい人間ではあっても，各陣営の嘘をうのみにしなかったことも。けれども，完全な自由がこの災厄からわれわれを救い，可能な進歩の道にわれわれを戻してくれるという，私の意見にあなたが賛成なさるかどうか，私には分かりません。自由の濫用はそれ自体で私を不安にすることはありませんが，それに怯える人々は常に権力の濫用を選びます。現在，チエール氏はそのことを理解しているように思われます。けれども，氏がこの重大な問題の決定者となったその主義を氏は守ることができるでしょうか？　その術を心得ているでしょうか？

何が起ころうとも，私たちは愛し合いましょう，あなたに関わることは一つ残らず知らせてください。私の心はやむことのない不安でいっぱいです。あなたの思い出が少しばかり紛らしてはくれますが。卑劣な宿泊人たちがクロワッセを荒らしたのではないかと心配しています。彼らは和平にもかかわらず，至るところで，相変らず，我慢のならない，嫌悪感を抱かせる人間になっているからです。ああ！　彼らを追い払うために私に50億フランがあれば！　取り戻したいと望みはしません。

こちらにいらっしゃい，ここでは平穏です。物質的にはずっとそうでした。仕事にまた取りかかろうと努めています。あきらめているのです，他に何ができましょう？　あなたはここで愛されています，ここではいつも愛し合いながら暮らしています。ランベール一家をできるだけ長く引き留めています。子供たちは皆，無事に戦地から戻って来ました。あなたは和やかに，そして，仕事をしながら暮らせましょう。仕事をする気になっていようと，否であろうと，仕事をしなければなりませんから！　まもなくうっとりするような季節になります。その間に，パリも落ち着きを取り戻しましょう。あな

たは平穏な一隅を探しておられます。それはあなたのものである私たちの心とともに，あなたのすぐ傍にあるのですよ！

私と私の子供たちのためにあなたを1000回抱擁します，孫娘たちは申し分ありません，ランベール家のおちびさんは可愛らしい。

G. S.[31]

ジョルジュ・サンドがこの普仏戦争の間，日々，書きとめたものは，『戦時下のとある旅人の日記』(*Journal d'un voyageur pendant la guerre*) として，『両世界評論』誌の3月1日，15日，4月1日の3号にわたって発表された。歴史学者モナ・オズーフの言葉を借りるならば，それは「幸福への強い愛着に結びついた，不幸に対する強烈な想像力」で，「戦争が人々や麦に及ぼす災禍を十分すぎるほど想像し，両陣営の歩兵隊を哀れむ」「人類の友」[32]の日記である。

この私は弱い心の持ち主です，年老いた吟遊詩人の中にたえず1人の女がいるのですよ。この人間の殺戮は私の哀れな心をずたずたにします。おそらく戦死することになる私の子どもたちや友人すべてのためにも怯えています。こうしたすべての最中(さなか)で，それでも，私の心は立ち直り，信念の高まりを感じているのです。自分たちの愚かさに気づくためにわれわれに必要なこの情け容赦のない教訓は役に立つはずです。

(サンドよりフロベールへ，1870年8月15日)[33]

使用したテクストは以下の版である。

George Sand Correspondance XXII

(éd. de Georges Lubin, Classiques Garnier, 1985)　abrév. *Corr. S.*

Gustave Flaubert Correspondance 3
(éd. du Club de l'Honnête Homme, 1975)　abrév. *Corr. F.*
Gustave Flaubert—George Sand Correspondance　abrév. *Corr. F.-S.*
(éd. d'Alphonse Jacobs, Flammarion, 1981)
George Sand, *Agendas* IV 1867-1871
(éd. d'Anne Chevereau, Jean-Touzot Libraire-Editeur, 1993)

注

1）lettre de Flaubert à Sand datée du 3 août 1870.
(*Corr. F.*, p. 577)

2）Georges Lubin 氏の調査によれば，70年後半，サンドがノアンの館を離れたのは，天然痘の伝染をおそれて9月下旬から，11月半ばまで，近隣のブサックの城館やラ・シャトルの友人宅へ家族とともに避難した時のみである。

3）1870年6月18日，ジュール・ドゥ・ゴンクールの死
1870年6月26日，アルマン・バルベスの死
ジョルジュ・サンドがバルベスに対し深い敬愛の念を抱いていたことは，すでに見た通りである。（拙稿「ジョルジュ・サンド—ギュスターヴ・フロベール往復書簡を読む(III)」，九州産業大学国際文化学部『紀要』，第9号，1997年7月）
亡命先ハーグでの死を知らせる電報を受け取ったときの深い悲しみを，サンドはその日，*Agendas* に次のように記した：
Je suis triste en dessous, très profondément : un télégramme m'a annoncé après le dîner la mort de mon pauvre cher Barbès aujourd'hui à 4 heures.　(p. 280)

4）lettre de Flaubert à Sand datée du 26 juin 1870.
(*Corr. F.*, p. 566)
姪カロリーヌへの手紙（1870年6月28—29日付）で，フロベールは一層率直に悲しみを吐露。
(…) J'ai fait, il y a huit jours, un triste voyage à Paris. Quel enterrement! j'en ai rarement vu de plus apitoyant. Dans quel état était le pauvre Edmond de Goncourt! Théo Gautier, qu'on accuse d'être un homme sans cœur, pleurait à seaux. Moi, de mon côté, je n'étais pas bien crâne : cette cérémonie, jointe à la chaleur qu'il faisait, m'avait brisé, et j'ai été pendant plusieurs jours dans une fatigue incompréhensible. Depuis hier, cependant, je vais mieux, grâce aux bains de Seine, je crois.
De sept que nous étions au début des dîners Magny, nous ne sommes plus que trois : moi, Théo et Edmond de Goncourt ! Se sont en allés successivement depuis dix-huit mois : Gavarni, Bouilhet, Saint-Beuve, Jules de Goncourt, et ce n'est pas tout! Mais il est inutile de t'attrister avec mes chagrins. (…)
(*Corr. F.*, pp. 567-568)

5）lettre de Sand à Flaubert datée du 27 juin 1870.
(*Corr. S.*, p. 103)

6）lettre de Flaubert à Sand datée du 2 juillet 1870.

(*Corr. F.*, pp. 570-571)

7) この夏，フランスは歴史に残る猛暑と旱魃に見舞われ，新聞は連日，詳細を報じたという。(cf. Alphonse Jacobs, *Correspondance Flaubert-Sand,* p. 299) 猛暑，乾燥は数か月に及んだ。この時期，サンドは *Agendas* で，暑さ，水不足などに頻繁に言及。

ex. (Juin) *Jeudi 23*-Nohant

36 degrés ! on étouffe. (p. 279)

Lundi 27-Nohant

Toujours le beau temps, la sécheresse fabuleuse, *historique.* (p. 280)

(Juillet) *Mercredi 6*-Nohant

38 1/2 degrés de chaleur, c'est le point culminant peut-être. On étouffe. (p. 282)

Dimanche 24-Nohant

45 degrés cent[igrades] à l'ombre ! C'est le coup de grâce peut-être; on se traîne. (p. 286)

8) ex. 1870. 7. 13 Aurons-nous, n'aurons-nous pas la guerre.

1980. 7. 16 Par dessus le marché, la guerre est déclarée et le mauvais Paris voyou, payé, se réjouit à grand bruit.

1870. 7. 17 On n'est pas si tranquille à la frontière, on se bat peut-être déjà, que de malheurs !

1870. 7. 18 Les Prussiens ont passé la frontière, on les a repoussé ; escarmouche, récit du départ des troupes, enthousiasme des Parisiens, on en parle.

1870. 7. 22 La guerre semble indécise ou du moyen, ou de la chose. Peut-être l'Europe interviendra-t-elle.

9) lettre de Flaubert à Sand datée du 22 juillet 1870.
(*Corr. F.*, p 575)

10) lettre de Sand à Flaubert datée du 26 juillet 1870.
(*Corr. S.*, pp. 128-129)

11) lettre de Flaubert à Sand datée du 3 août 1870.
(*Corr. F.*, pp. 577-578)

12) lettre de Sand à Flaubert datée du 7 août 1870.
(*Corr. S.*, pp. 137-138)

13) le 3 août 1870. (*Agendas,* p. 288)

14) le 5 août 1870. (*ibid.* p. 289)

15) lettre de G. Sand à Flaubert datée du 7 août 1870.
(*Corr. S.*, pp. 137-138)

16) とはいえ，Sand は *Agendas* で，戦争に関して毎日のように言及し，公式に正確な情報が発表されない不安を頻繁に洩らしてもいる。戦時下のフランス社会の断面を *Agendas* の簡潔な記述が鮮やかに浮かび上がらせる。

ex. 1870. 8. 17

Pas de nouvelles de l'armée, on cache le opérations, peut-être les revers. On a parlé de 40.000 Prussiens fait[s] prisonniers sans coup férir. (p. 293)

1870. 8. 26

Pas de nouvelles, tout est sombre. A force d'envelopper les Prussiens on sera enveloppé par

eux. On craint une boucherie de républicains dans toute la France en même temps que les désastres de l'invasion. Dans ces moments-là le peuple devient fou et on désigne qui l'on veut à sa fureur. (p. 295)

1870. 8. 30

Toujours la même situation. Les nécessités de la guerre sont-elles si réellement strictes qu'on doive laisser ignorer à une nation en danger où est et ce que fait son armée ?

Ce silence ne cacherait-il pas une négociation de paix sur laquelle nous ne serions pas plus consultés qu'à la guerre d'Italie ? Personne ne paraît le croire, moi, je me l'imagine. (p. 296)

17) lettre de Flaubert à Sand datée du 17 août 1870.
(*Corr. F.*, p. 581)

18) le 5 sepambre 1870. (*Agendas*, p. 298)
この日，サンドが友に書き送った手紙には共和政到来の熱狂が一様にあふれる。

○ lettre à Juliette Adam

Oui, oui, ayons au moins un jour de bonheur au milieu de nos désespoirs. Vive la république quand même ! J'écrivais il y a quelques jours : 《Attendez !》. Paris n'a pas attendu, Paris a conquis sa liberté sans coup férir ; j'espère que, plantée ainsi, elle est viable. A présent, il faut reconquérir la patrie ! (*Corr. S.*, p. 170)

○ lettre à Eugène et Esther Lambert

La voilà donc revenue sans coup férir, cette pauvre chère république ! Puisqu'elle peut renaître ainsi par la libre volonté de Paris, espérons qu'elle est viable cette fois. Sinon ce sera pour une autre fois, elle ne peut mourir, elle ne mourra pas, elle renaîtra toujours de ses cendres.

J'espère, malgré tous nos désastres, que la paix va se traiter honorablement. Je ne vois pas ce que les Prussiens feraient de la France s'ils pouvaient rêver de la conquérir, l'Europe ne le permettrait pas. C'était une querelle privée avec Badinguet, on l'a laissé écraser. Pauvre France, elle expie sa folle servitude ! Mais l'honneur est reconquis et Dieu est maintenant pour nous. C'est égal, mettez-vous en défense. (*ibid.* pp. 170-171)

○ lettre à Edmond Plauchut

Quelle grande chose, quelle belle journée au milieu de tant de désastres ! Je n'espérais pas cette victoire de la liberté sans résistance. Voilà pourquoi je disais : n'ensanglantons pas le sol que nous voulons défendre. Mais devant les grandes et vraies manifestations tout s'efface. Paris s'est enfin levé comme un seul homme ! Voilà ce qu'il eût dû faire il y a quinze jours. Nous n'eussions pas perdu tant de braves. Mais c'est fait, vive Paris ! (ibid. p. 173)

19) le 6 septembre 1970. (*Agendas*, p. 299)

cf. le 7 septembre 1870. (*ibid.* p. 299)

Toujours plus triste. Les Prussiens avancent toujours et rien ne s'organise hors de Paris. On nomme des préfets, on s'occupe d'administration comme si on avait le temps de gouverner. Craint-on que tous trahissent le pays ? Est-ce possible ? On ne peut plus s'occuper, se distraire.

le 8 septembre 1870. (*ibid.*)

Les Prussiens avancent toujours. Les journaux font généralement trop de bravacheries. Ils sont trop insulteurs. En revanche, J[ules] Favre publie un admirable manifeste qui devrait arrêter l'ennemi s'il ne nous haïssait tous en tant que français. Pourquoi nous rendre haïssables !

20) lettre de Flaubert à Sand datée du 10 septembre 1870.
(*Corr. F.*, pp. 585-586)

21) lettre du même à la même datée 28 septembre 1870.
(*Corr. F.-S.*, pp. 314-315)

22) lettre de Flaubert à Mme Roger des Genettes datée du 14 septembre 1870.
(*Corr. F.*, p. 587)

23) lettre de Flaubert à sa nièce Caroline datée du 27 septembre 1870. (*ibid.* p. 592)

Mon pauvre Loulou,

Je suis *remonté*, car je suis résigné à tout. Je dis à *tout*. Depuis dimanche, où nous avons appris les conditions que la Prusse voudrait nous imposer, rien que pour un armistice, il s'est fait un revirement dans l'esprit de tout le monde. C'est maintenant un duel à mort. Il faut, suivant la vieille formule, 《vaincre ou mourir》. Les hommes les plus capons sont devenus braves. La garde nationale de Rouen envoie demain son Ier bataillon à Vernon ; dans quinze jours toute la France sera soulevée. J'ai vu aujourd'hui à Rouen des mobiles des Pyrénées ! Les paysans de Gournay marchent sur l'ennemi. De l'ensemble des nouvelles, il résulte que nous avons eu l'avantage dans toutes les escarmouches qui ont eu lieu aux environs de Paris, malgré la panique des zouaves du général Ducrot. (…)

24) lettre du même à la même datée du 11 octobre 1870.
(*Corr. F.*, pp. 596-597)

25) lettre de Sand à Flaubert datée du 14 octobre 1870.
(*Corr. S.*, p. 205)

26) lettre de Flaubert à Sand datée du 27 novembre 1870.
(*Corr. F.*, pp. 608-609)

27) lettre de Flaubert à sa nièce datée du 18 décembre 1870. (*ibid.* pp. 610-611)

28) lettre de Sand à Flaubert datée du 4 février 1871.
(*Corr. S.*, p. 288)

29) lettre de Flaubert à Sand datée du 15 février 1871.
(*Corr. F.*, p. 620)

30) lettre de Flaubert à Sand datée du 11 mars 1870.
(*ibid.* pp. 625-626)

31) lettre de Sand à Flaubert datée du 17 mars 1870.
(*Corr. S.*, pp. 341-343)

32) Mona Ozouf, *Le bon sens de George Sand*
(*Le Nouvel Observateur* du 27 mars au 2 avril 1997)

33) lettre de Sand à Flaubert datée du 15 août 1870.
(*Corr. S.*, p. 146)